

## 【カテゴリーII】

日本建築学会計画系論文集 第541号, 115-122, 2001年3月  
J. Archit. Plann. Environ. Eng., AIJ, No. 541, 115-122, Mar., 2001

# 茶室内の亭主位置と正客位置における視空間の構成について <視深度>による建築平面記述・評価の研究

## THE COMPOSITION OF VISIBILITY ON THE POSITION OF HOST AND MAIN GUEST IN THE TEA ROOM

A study on architectural plan description and evaluation with "sight-depth"

北川 啓介\*, 横山 順子\*\*, 早瀬 幸彦\*\*\*, 麓 和善\*\*\*\*, 若山 滋\*\*\*\*\*

*Keisuke KITAGAWA, Junko YOKOYAMA, Yukihiko HAYASE,*

*Kazuyoshi FUMOTO and Shigeru WAKAYAMA*

In this study, we measure "Sight-Depth" in the tearooms from two kinds of viewpoints of the host and the main guest to the architectural components which block person's view like wall, Toko, partition and so on, analyze the shape of Sight-Depth-Graph and consider the space perception in detail. In this research, they tend to compose pecking order between the host and the main guest to represent their human relations.

As a result of comparison with Sight-Depth-Graph on the architectural plans at the tea party from the 15th century, strong effects of the design intention of each designer have been confirmed.

**Keywords:**

*Sight-Depth, tearoom, plan, evaluation, host, main guest*

視深度, 茶室, 平面, 評価, 亭主, 正客

### 1. はじめに

本研究は、建築平面内のある視点から水平視線を遮るものまでの距離として定義されたく視深度>に関する一連の論文の第5報である。まず、建築内部平面においてコンピュータを用いて視深度を測定する。引き続き、その視平面の空間的な広がりをく視深度グラフ>として記述する。更に、建築は個人を中心として様々な距離を囲い込むものであるという視点に基づいて世界中の様々な建築空間構成を比較考察するために、本稿では特に茶室における視覚的な平面構成を評価する。

歴史的背景をふまえ、千利休以降の小間茶室を対象として、亭主と正客の空間的な広がりを各々の位置の視深度グラフから読み取り、加えて両者の座位置視空間の傾向とその意味合いの相違を明確にする。

これまで、視深度による建築平面評価の可能性を探るために、第1報<sup>文15)</sup>では、視深度の概念、測定プロセス、コンピュータシステム、および平面記述の各指標とその手法について説明し、第2報<sup>文16)</sup>では第1報に基づいて近代住宅作品を通覧的に測定・分類し、第3報<sup>文17)</sup>では、単純な平面図を対象とした心理実験との比較考察を試みた。また、第4報<sup>文18)</sup>では、空間を構成する要素を壁と開口部という建築の二要素に分けて考察することで近代住宅作品の多様な変化を追った。

本稿では、茶室における点前座と客座という2つの位置毎における空間の広がりを測定し、つまり視深度グラフを詳細

に考察していく。つまり、平面全体での視環境の変化を研究対象とするのではなく、ある視点を固定した上で視線の到達距離を詳細に考察する。更に、点前座と客座を取りまく空間の特徴により茶室を分類し、視深度による茶室作品の視覚的位置づけを明らかにする。

15世紀以降、わび茶の開祖である村田珠光、引き続き草体化を継承した武野紹鷗へ時代が下るに従い発展し、世にいう草庵の茶が普及した。客座と点前座が別々の室で行われたものが、客と亭主が一つの部屋に入り、茶の湯を介して親しみを深め、いわゆる「主客同座」の方式が一般化することにより、茶室は生まれた。その後、千利休により草庵化が極められ、また、その弟子である織田有楽斎、古田織部、小堀遠州など武家の茶匠により、客と亭主という茶の湯の中での人物の上下関係を視覚的な空間の違いによって間接的に示す手法がとられた<sup>文13)</sup>

### 2. 研究の流れ

研究の流れを段階的に示す。

- (1)重要文化財に指定されている茶室をはじめ、その設計意図を探る上で重要と考えられる茶室、また、茶匠の創意工夫が感じられる茶室を、視深度評価に有効な茶室として選出する(表1)。
- (2)選出した茶室の平面図<sup>文19)</sup>を、コンピュータによる解析用データとして、亭主と正客の位置と方向の情報を含めたく視深度測定用平面

\* 名古屋工業大学社会開発工学科

Graduate Student, Dept. of Architecture, Urban Engineering and Civil Engineering,  
Nagoya Institute of Technology, M. Eng.

博士後期課程・修士(工学)

Matsushita Electric Works, Ltd., B. Eng.

\*\* 松下電工㈱ 学士(工学)

Kume Sekkei Co. Ltd., Architectural Design Dept. 2, Dr. Eng.

\*\*\* 勝久米設計第2設計部 博士(工学)

Assoc. Prof., Dept. of Architecture, Urban Engineering and Civil Engineering,  
Nagoya Institute of Technology, Dr. Eng.

\*\*\*\* 名古屋工業大学社会開発工学科 助教授・工博

Prof., Dept. of Architecture, Urban Engineering and Civil Engineering, Nagoya  
Institute of Technology, Dr. Eng.

\*\*\*\*\* 名古屋工業大学社会開発工学科 教授・工博

Prof., Dept. of Architecture, Urban Engineering and Civil Engineering, Nagoya  
Institute of Technology, Dr. Eng.

表1 対象とした茶室 36席

01 利休四疊半 千利休 桃山(天正)	02 待庵 千利休 桃山(天正)	03 不審庵 千利休	04 利休二疊台目 千利休	05 利休一疊台目 千利休	06 露滴庵 戸内紹智 江戸(中期)	07 湘南亭 千少庵 桃山	08 庭玉軒 金森宗和 江戸(前期)	09 如庵 織田有楽 江戸(元和4頃)
10 元庵 織田有楽	11 密庵席 小堀遠州 江戸(寛永)	12 憂昔庵 戸内紹智 江戸(中後期)	13 織部三疊台目 古田織部	14 春草庵 織田有楽 江戸(前期)	15 燐心亭 水尾天皇 江戸(前期)	16 燕庵 戸内劍仲 江戸(天保2頃)	17 閑陰庵 千利休 江戸(元文4頃)	18 道安四疊半 千道安
19 松琴亭 智仁親王	20 八窓庵 小堀遠州 江戸(前期)	21 八窓庵 小堀遠州 江戸(寛永5年)	22 今日庵 千利休 江戸(天明8年)	23 中の坊茶室 片桐石州 江戸(前期)	24 桟床席 覚々齋 江戸(元文4頃)	25 鎮の間 如心斎	26 又鶴 千宗旦 江戸(天明8年)	27 高林庵 片桐石州
28 藤看席 藤村庸軒 江戸(貞享)	29 義庵 如心斎 江戸(寛保2年)	30 霽床席 如心斎 江戸(寛保2年)	31 夕顔亭 小堀遠州	32 飛溝亭 光格天皇 江戸(末期)	33 宗全二疊台目 久田宗全 江戸(寛政)	34 管田庵 松平不昧 江戸(寛政)	35 向月亭 松平郷庵 江戸(寛政)	36 清香軒 前田斉泰 江戸(文久3年)

注) 各茶室毎に、上から視深度を測定するためコンピュータ分析の元データとなる視深度測定用平面図、茶室番号と茶室名、好み、年代を示す。

注) 年代は、『国宝・重要文化財建造物目録』による。

図へ変換する。

(3)亭主位置、正客位置における視深度をコンピュータにより360°計測し、得られたデータを基に、亭主視深度グラフと正客視深度グラフを作成する。

(4)視深度グラフ上に現われる床・中柱・袖壁などの茶室の主な構成要素の形や、視空間の広がりに着目し、点前座と客座におけるそれぞれの空間特性を明らかにする。

(5)亭主と正客の位置毎に、視深度グラフの構成の傾向を類型化して分類し、茶室同士の比較考察を行った後、系譜について述べていく。

### 3. <亭主視深度>と<正客視深度>の定義

茶室の平面構成の基本は、間取り・炉の切り方であり、それによってほぼその茶室の構成や持ち味を推し計ることができる。内部は点前座と客座とから成り立つ。

点前座と客座をつなぐ役割をするのが炉である。炉の切り方は、茶室の働きや持ち味を左右する決定的な要素である。方丈の意識に則った四疊半の炉に対し、「隅切」から、右手の客の目近くに炉を移した「大切」、更には客座側に炉を切り出した「台目切」へと、炉を客の目に近く

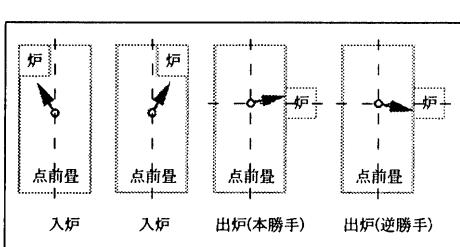
の流派や作法が存在し、亭主位置と正客位置をそれぞれ一点に定めることは困難であるが、茶室平面を分析するという目的上、また、研究における一般性を持たせるために、本稿では、炉や躰口などの茶室の平面図から得られる情報より、亭主(図1)と正客の位置と方向について以下の統一した規則を定めた。

- ・亭主は点前疊、正客は貴人疊の、それぞれ疊の長手方向の二等分線上に位置する。
- ・亭主は勝手口、正客は躰口の位置をそれぞれ考慮する。
- ・入炉の場合、亭主は、炉から妻手の半分の距離を離れたところから炉の遠い方の角に向く。
- ・出炉の場合、亭主は、点前疊の長手方向の二等分線上と炉の中心線の交点に座し、本勝手と逆勝手によって方向を変えながら、炉の遠い方の角に向く。
- ・正客は、基本的に貴人疊内において点前と床がよく拝見できる位置に座り、亭主の点前方向を疊と直交して向く。

### 4. 視深度グラフとその測定方法

既報<sup>15)16)17)18)</sup>においては、建築空間内を格子状に分割したものの各中心点の視断面における視深度変化つまり視深度グラフを、数学的指標により特徴や傾向を代表させて、その数値を濃淡により平面図上に記述することで、建築空間内の空間配置について研究してきたが、本稿では、茶室空間内の亭主位置と正客位置における平面構成をそれぞれ詳細に分析していくために、亭主位置と正客位置の2点における視深度グラフを、直接、分析する。

以下、亭主視深度と正客視深度の測定方法の要点(図2)を記す。



くし、点前をいかに見せるかということに関心が注がれた<sup>13)</sup>。

点前による人の動きのある茶室において、いくつか

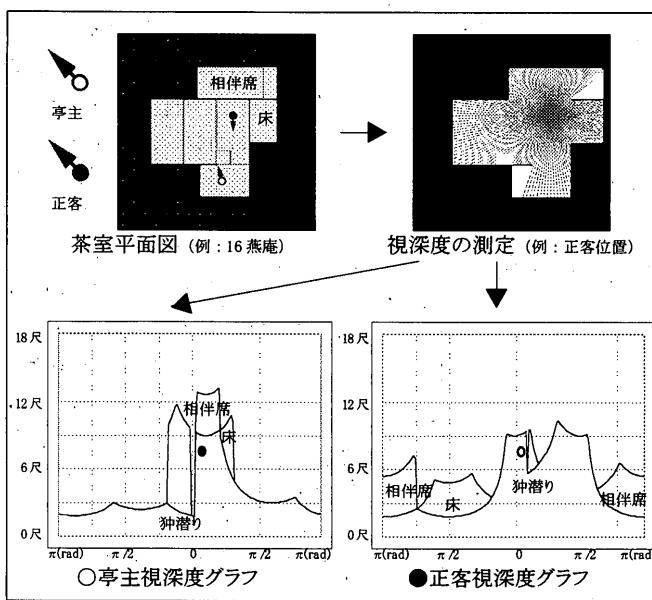


図2 亭主視深度グラフと正客視深度グラフ

- (1) 各平面図をスキャナで読み取り、画像処理ソフト上で亭主位置と正客位置の情報を与えた視深度測定用平面図を作成する。
- (2) 作成した測定用平面図内の亭主位置と正客位置において、点前ににおける正面を視線の水平方向  $0^\circ$  として、左右  $\pi \text{ rad}$  ( $180^\circ$ ) ずつ、合計  $2\pi \text{ rad}$  ( $360^\circ$ ) を  $180$  分割してコンピュータを用いて視線の室内各部までの到達距離を測定する。
- (3) 得られたデータを、横軸を視線の水平方向、縦軸を視線の到達距離とした視深度グラフに記述する。その際、茶室毎の大きさの違いについても比較を行いやすくするために、グラフの縦軸の目盛りを最大  $18$  尺にすべて揃えて記述した。
- (4) 下部吹抜けの狹潜りや、道安形式・燕庵形式における襖の開閉に関しては、人間の視環境も考慮して、座視と立視の二種類の視深度をもつ部分として、ひとつの視深度グラフ内に記述した。
- (5) 相伴席・棚・付書院など茶室の付属的な建築部位に関しては、視深度グラフを作成する際に、茶室内の建築部位名を適宜、視深度グラフ上に入力する。
- (6) 視深度測定平面図を作成する際、床や付書院の造作から壁の凸凹・戸当たり・組子・方立などまで、視断面に変化を与える構成要素に関しては、可能な限り入力する。

この様な条件の下で、パーソナルコンピュータを用いて茶室36席の測定を行い、亭主と正客の各位置毎の視深度のデータについて1つの茶室内で2つの視深度グラフを得た。

## 5. 位置的な差とその考察

茶室36例からは、茶室の平面形態や亭主と正客の位置の変化によって、多種多様な視深度グラフが確認された(表2,3)。

そこで、各々の視深度グラフの形態の相違を比較するにあたり、最も基本的な変化である「床見え」・「視断面面積」・「狹潜り部分」・「視深度変化」について考察する。

### (1) 「床見え」の違い

利休以降の小間の茶室では、武野紹鷗の時代の格式高い床構えが、各茶匠によって、一段高いという本質的な形容を失ったものも含めて飾りの場として、異なる特徴をとらえて多様化していく<sup>文13)</sup>。

ここでは、各茶室の亭主位置と正客位置における領域性を特徴付け、茶の湯において重要な建築的要素である「床見え」の違いについて考察する。

「床見え」に関して、視深度グラフ上の床に該当する部分の形態でその見えを判断する。床部分の視深度グラフの形態が広く、浅く、平坦なほどその見えは大きいと判断し、床部分において視深度グラフが不連続な形態を成すものや、存在しない場合はその見えは小さいと判断する。

一般的に、亭主よりも正客の床見えが大きい。正客視深度では、床部分が広く、浅く、ゆったりとして見えは大きく、その形態もほとんど定型である。茶の湯の中で、床が客に対して重要な位置性をもっていると言える。逆に、亭主視深度では、殆どが狹潜りや床柱によって、不連続部分に該当し、見えは基本的に小さい。亭主に対して斜行するように床が存在し、視深度の急激に変化するところ、つまり視深度グラフの傾きが急などころに床が位置し、床の奥行きが深く見える。

ただし、以上のような特徴に該当しない茶室がいくつか見られる。まず、亭主の後方に床が位置する下座床形式の07湘南亭、10元庵、27高林庵である。下座床形式は、6.(2)③に後述するように、亭主の床見えが大きく、正客の床見えが悪い。また、下座床以外にも、床の見えが個性的であり、床に対する設計意図が他と異なる茶室として、12憶昔席、13織部三疊台目、23中の坊茶室、30畳床席、33宗全二疊台目などが上げられる。

23中の坊茶室は、亭主の点前座に対座するように正客と床が存在し、亭主視深度グラフの正面の最も奥まったところに象徴的に床が構えられている珍しい例である。正客視深度では床が後ろに位置するが、視深度が浅いところでもまっすぐ対面し、亭主と正客の位置性を床の見えによって意図的に見せようとしている。

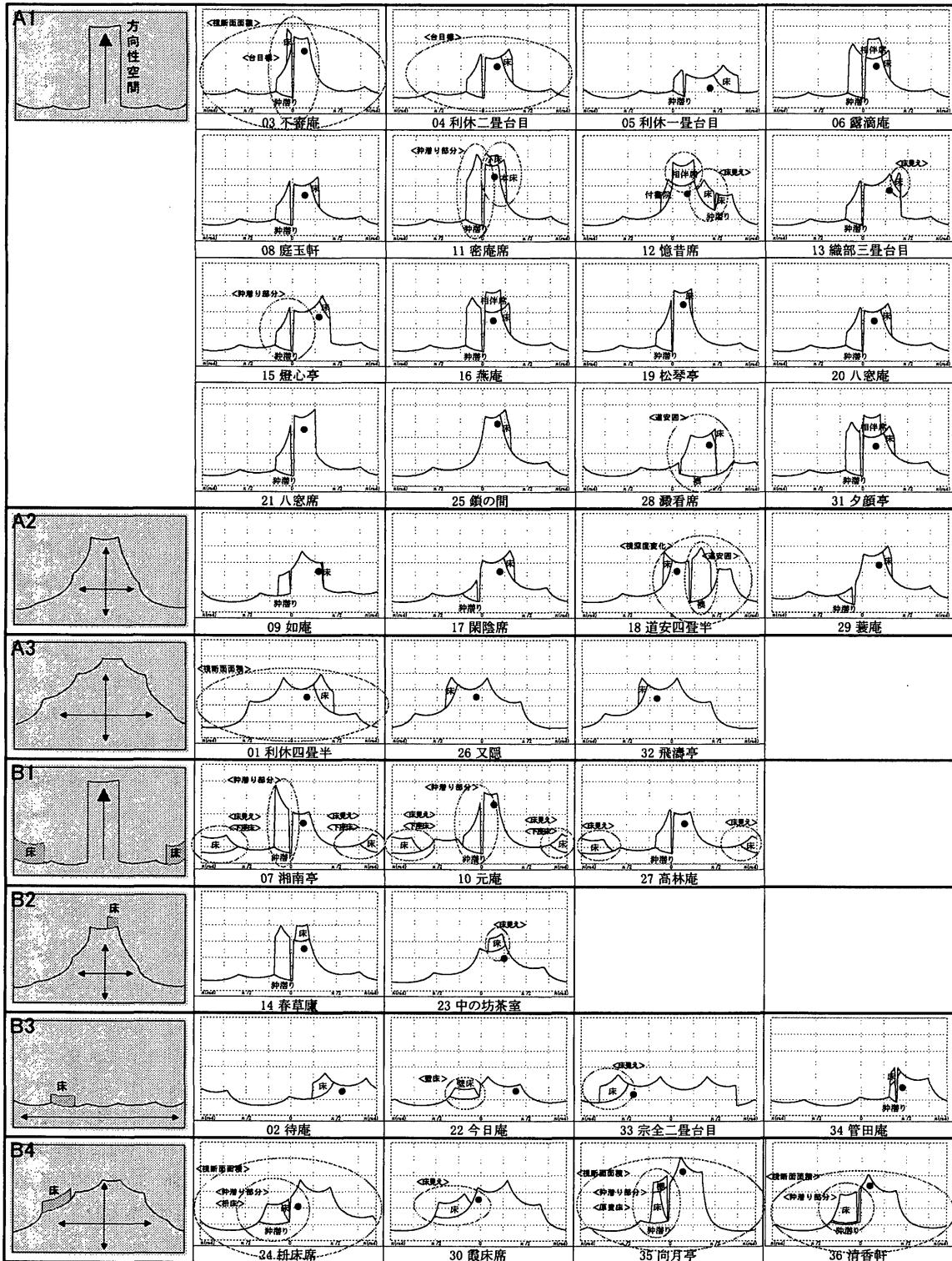
### (2) 「視断面面積」の違い

「視断面面積」は各測定点から見ることのできる領域の面積である。つまり、視断面の広さを表す指標である。ここでは、亭主と正客の視断面面積の違いについて考察する。

二疊以下の非常に小さい茶室においては、亭主と正客の視深度において視断面面積の差は見られないが、それより大きい茶室の亭主視深度において、視断面面積が圧倒的に小さく、奥行きのある視深度方向が、茶室の付属的な要素によって限定される傾向がある。特に、中柱をもつ茶室に顕著に見られる。茶室が二疊より大きくなるに応じて、正客位置の視空間が広がっていく一方で亭主の姿は常に控えめに現れる上、亭主位置の視空間はそれほど大きく増加しない。この事から、常に限られた視空間の広さにおいて亭主が点前をすることで、亭主に控えめな領域の広がりをもたせようとする作意が読み取れる。

一方、03不審庵、01利休四疊半など、中柱を持たない茶室では、亭主視深度、正客視深度ともにゆったりとした広がりを持ち、これらの茶室においては、亭主、正客間の視断面面積の差は非常に小さいといえる。

中柱をもつ茶室の中でも、36清香軒、35向月亭、24枠床席などの原叟床・枠床形式のものは、亭主と正客の視断面面積の違いは顕著ではない。また、12憶昔席のように、相伴席が付加され、付書院や棚などの視断面の変化に大きな影響を及ぼす建築要素に囲まれた広い茶室においても、その開閉や立座による視断面の変化による亭主と正客間の視断面面積の違いは少なく、同じ変化を見せる。

表2 亭主視深度グラフの一覧とその分類  
注:分類に関しては7.(1)参照

## (3) &lt;狹潜り部分&gt; の形状

狹潜りは中柱と袖壁の吹き抜けであり、視線が通過したときにかたちづくられる向側の領域を狹潜り部分とする。視深度グラフ上では視線が通過しているものと、遮られているものが同時に表現されている。床部分の比較においては実際の床の平面形が方形であるため視深度グラフ内での形状は基本的に歪んだ四角形であったが、狹潜り部分の実際の形態は方形と限らず視線が通過した先に何が存在するかにより視深度グラフでの狹潜り部分の形状は異なる。

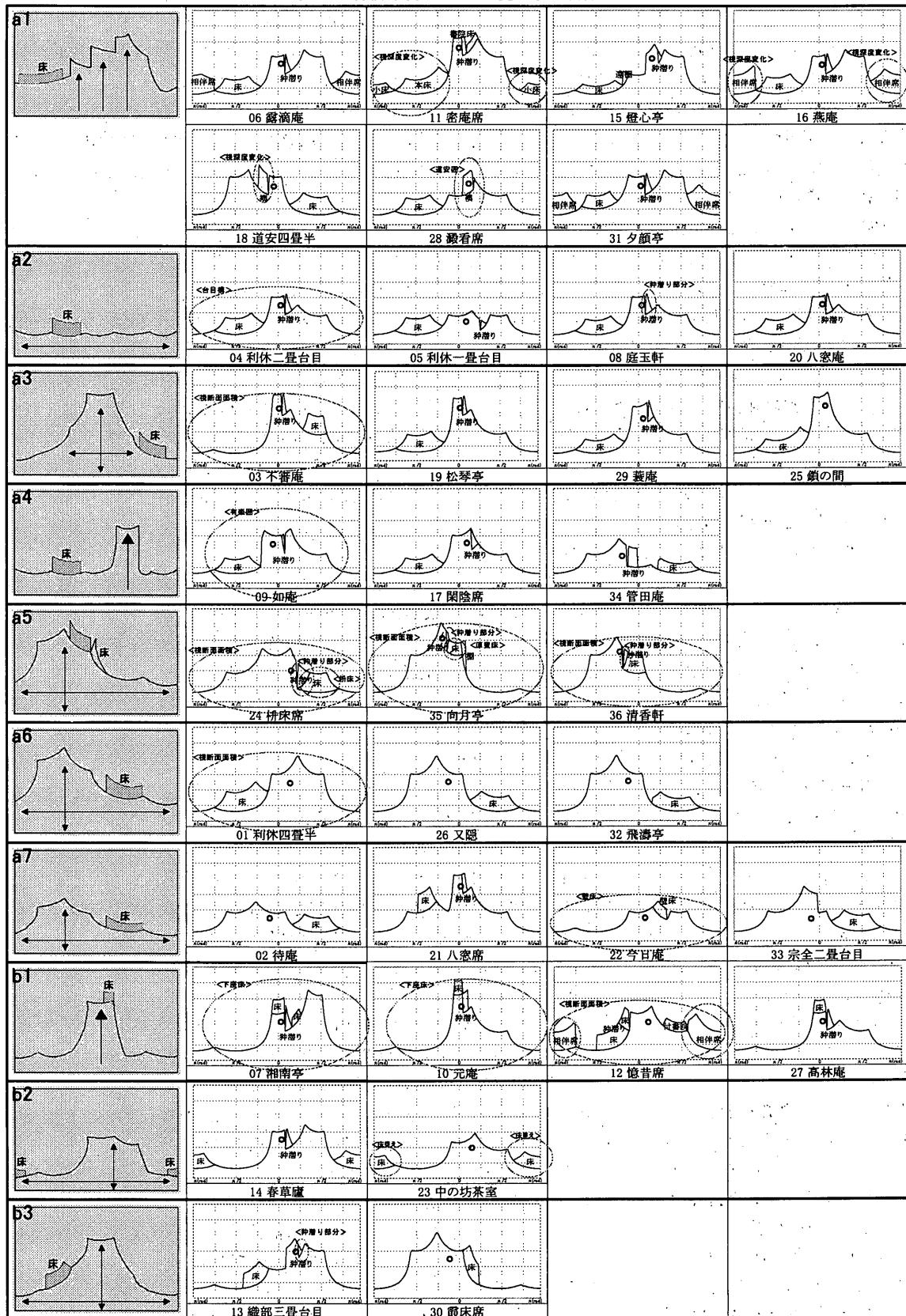
るという境界性を、視断面面積の違いと同様、客座ではなく、自らの視空間の特徴によってみせることとなる。

10元庵では、亭主視深度グラフの狹潜りが非常に大きな変化を与えているうえ、正客視深度グラフにおける狹潜り部分が亭主や床に付随するように動いている。35 向月亭、36 清香軒、24 枕床席では、正客視深度に狹潜りは大きく現れないが、亭主視深度グラフにおいて狹潜り部分に床や棚が重なり、点前座を一層多様なものにしている。

狹潜り部分により、亭主視深度グラフにおける点前座自体の領域

正客視深度グラフにおいては、08 庭玉軒、13 織部三疊台目、24 枕床席、36 清香軒などに顕著なよう、狹潜り部分は基本的に細長い三角形として存在し広がりがなく目立たない。それに対して、茶室毎の亭主視深度グラフを比較すると、狹潜り部分の配置が、視深度グラフに大きく変化を与える部分として、その形態自体と共に特徴をみせている。11 密庵席、07 湘南亭の亭主視深度グラフに代表されるように奥深く長細く方向性が強い空間性を視深度グラフの中心に見せるものや、15 燈心亭・24 枕床席の亭主視深度グラフにみられるように視深度グラフの変化を緩やかにする浅く広い狹潜りをもつものが確認できる。こうした視深度グラフの形狀により、実際の茶室平面の特に亭主位置において、狹潜り部分の形態が特定方向への奥行き・方向性のない浅く角度の大きな広がりという二つの視空間変化を形成している。亭主は、自分の点前座が茶室内で特殊な領域であ

表3 正客視深度グラフの一覧とその分類 (注)分類に関しては7.(1)参照



る書院風茶室における棚・付書院などの付加要素による変化や、燕庵形式における茶室の形態そのものの変化、さらに道安囲における戸の開閉に伴う変化など、つまり平面構成による変化に関しては、亭主視深度グラフよりも正客視深度グラフが複雑な形状となっている。

11 密庵席の本床や小床は、亭主視深度において畳の構成に沿うかのように控えめに仲潜りの変化に付着しているが、正客視深度グラフでは逆に、茶室の壁が延長するように本床と小床が広がりを見せていているため、付属しているというよりも、むしろ室 자체に広がるような印象を与えている。

その他、16 燕庵を代表として相伴席をもつ茶室において、平面形態自体の変化は正客視深度を大きく変化させ、点前座より客座に大きなゆとりを与えており、次章の一部で考察するが、18 道安四叠半を代表とする道安囲の茶室における襖の開閉に伴う変化は、逆に正客視深度グラフよりも亭主視深度グラフに大きな変化を与えていることが伺える。

## 6. 茶室構成の分析

茶室構成の設計意図はその亭主、正客視深度に明確に現われる。ここでは、研究で扱った36例の茶室の中で、構えと床という構成要素が視深度グラフ内に特徴的に現れている例を挙げ、それらが視空間に及ぼす影響を考察する。

性は非常に変化に富んでいることがわかる。

### (4) 視深度変化の現れ

上述の視深度グラフ内の床部分や仲潜り部分の変化は正客視深度グラフより亭主視深度グラフにおいて顕著であるが、11 密庵席に代表され

### (1)構え

#### ①台目構

台目切りの炉を切ってある点前疊の客付,上手の炉隅部分に二寸程の板を置き換える,中柱を立てて袖壁を付ける構えのことを,台目構といい,利休が大阪屋敷内に三疊台目の茶室をついたのが始まりであると伝えられている。この茶室では袖壁がついており,あたかも利休が次の間で点前をしているかのように感じたという茶会記も残されている<sup>22)</sup>。やがて,袖壁は下方を吹き抜いて道具座が客座から見えるように進化した。このように,台目構は客座と一連なりでありながらそこに半ば隔てを設け,あたかも次の間で点前をするような気持ちや,客座に対して下座であるという謙った亭主の心構えを表現したものと思われる。

04 利休二疊台目は台目構の最も基本的な形態である。正客視深度では,中柱が点前空間を遮るように働き,視深度グラフの尖形部分で亭主の点前空間と重なる。亭主視深度では,基本的に台目疊から正客の方向に空間的広がりを持つ一方向性が見られ,自らの点前座を遮るものではなく,その向側は床・点前座・ゆとりの空間に分けられ,その空間の大きさや重なりに茶室の個性が現れてくる。

03 不審庵の亭主視深度では,正客方向の広がりが大変細長く,正客の空間の境界性が強くなる。台目構という平面形態を大きく規定する茶室であるにも関わらず,その中で意匠的に変化に富んだものの特徴的な例である。

#### ②道安囲

間仕切壁で小間空間を仕切ることは,中板や半板を入れて空間にひろがりとゆとりを求めたものとは,本質的に異なった意図がある。道安囲は,点前疊脇に中柱を立て,広い方に壁を付け,中柱側に火灯口を開け,太鼓張の襖をはめた構成であり,台目構以上に次の間に下って茶を点てるという謙虚な心構えを表現したものである。本研究では,18道安四疊半と28瀬看席の2つの茶室が該当するが,前者は出爐であり,後者は入爐であるので,わずかに亭主位置が違い,特に亭主視深度グラフに次のような差異が現れた。

18道安四疊半では,出爐により亭主位置が間仕切壁からはみ出し,亭主視深度グラフの右寄りには,襖の開閉により幅が狭く奥行きの深い尖った変化が表れている。また,同じ視深度グラフ内の正面には正客と床が遠く配され,勝手口から炉に至る亭主の点前空間と,闕口や床を含めた正客の点前空間との間に,襖の開閉により見えかくれする空間が挟まれるような構成をみせる。亭主が点前により用いる点前空間と,正客が点前により用いる点前空間とが,亭主視深度グラフにおいて大きく対比されている。

一方,28瀬看席においても,亭主の視深度に大きな変化が見られた。襖を開けると同時に亭主視深度に床前の正客を含めた客座が右手に幅広く現われ,それまで狭く変化に乏しい空間であったものから幕を開けるように茶室空間が延びていく。また同時に,正客視深度において,亭主が火灯口の中心方向に現前する。28瀬看席における亭主と正客のふたりは,襖という建築要素の開閉により空間を共にする事となる。

道安囲という変化に富む構えに関して,亭主と正客を取り囲む環境は上記2席で異なり,その用法や意図に特徴的差異が認められる。

#### ③有楽囲

点前疊と有楽の半疊との間に立てられた板の仕切りをもつ囲いのことである。床脇と茶道口との間に,三角形の鱗板を入れ壁面を斜行させた空間をつくっており,茶道口と客座とを結ぶ空間に広さとゆとり

をみせる効果的で独創的な構成とみることができる。従って,道安囲とは全く目的の異なる囲いである。

火灯型に割り抜かれた炉先の板壁によって,亭主視深度は二つに分断され,方向性の強い他の亭主視深度に比べると苦渋さがない。鱗板という工夫が点前座をやわらげる働きをしていることが分かる。

正客視深度は,床が左側に幅広く存在し,鱗板は床脇に隠れて見えない。09如庵は,中柱により空間が大きく分断されているが,構成要素のばらつきは小さい。

### (2)床

#### ①原叟床・枠床

疊一疊を板敷きとして,床の間口と深さを画する出隅に床柱を立て,板疊の上に框床を設けたものを原叟床という。また,座敷の隅の半間四方を床としたものを枠床という。ここでは,そのうち床柱の奥の袖壁が狹潛りをもつものを対象とする。

原叟床の例である35向月亭や枠床の例である24枠床席のそれについて,亭主視深度グラフ内の狹潛りから床が伺える。正客視深度についても,亭主の点前空間・狹潛り・床の空間的な構成が狭い範囲に収まっている。亭主と主客が茶室の構成部位を挟むよう向き合う,特殊な対座をもつ茶室といえる。

#### ②壁床

わずか二疊の平面に,茶室として最も重要な機能を残して整然と凝集させた構成が特徴的な22今日庵にある奥行きを持たない床である。

床による空間の膨らみや,付属的な要素による立体変化が全く無く,大変簡素な空間性を見せつつも,亭主視深度グラフの中の正客が壁床の前に座しており,床と正客を重ね合わせている茶室として特色を出している。

#### ③下座床

点前座の勝手付けに床を構えるなど,点前座を上座に据えたものという。亭主視深度の床見えが大きく,正客視深度の床見えが悪いことがグラフから伺える。

07湘南亭と10元庵とを比較すると,茶室の平面形態は長方形と二字型と大きく異なるものの,亭主視深度グラフにおいては,正面には狹潜り部分が長く尖って存在し,左右両端には床が位置するという共通した特徴をみせる。

## 7. 座位置視空間の傾向

本稿で対象とした茶室36例において,亭主視深度・正客視深度それぞれの類似点や傾向が確認された。そこでこの傾向をより明確にするため,最も単純な違いである,床見えの違い・視深度変化の大小(不連続部分)・視線到達距離によって茶室36例を分類し,その上で特に類似した形のものをグループ化し,それぞれの特徴によって図3と図4のとおり模式化した。

「床見えの違い」について,床部分が不連続でなく,人物に正面しているものを「床見え大」,床部分が不連続であるものを「床見え小」として2種類に分けた。

「視深度変化の大小」は,視深度標準偏差<sup>23)</sup>の数値として統計的に表し,かつ,不連続のあるものに関しては更にその現れ方を考慮して計10種類に分類した。亭主視深度における不連続部分は,その殆どが空間の方向性を示すことから,方向性と不連続を同等な要素として扱い,方向性を持つものとそれ以外のものとに分類した。正客視

深度グラフでは、それらが現われるもの全てを「曲線変化大」に分類し、その中でグラフ形状の類似性を元に、細かくタイプ分けした。但し、変化の中でも連続性が強いものは除いた。

「視線到達距離」は、グラフの最も深い部分の深さを元に3段階に分類した。

### (1) 分類

#### ① 亭主視深度グラフの分類と考察

亭主視深度グラフは、表2のとおり7種類に分類される。

(A1)…視深度の深さに関わらず強い一方向性を示すもの。深さは様々であるが、 $50^\circ \sim 80^\circ$  の狭い間口にのみ奥深い広がりをもつものすべてをこのタイプとする。床は、不連続部分となるため殆ど見えない。広がりをみせる領域以外は閉ざされた狭い空間となっている。この部分的に間口が狭く奥行きが深い空間を、ある方向にのみ視線が届くという意味合いから、これを「方向性空間」とする。正客はほとんど方向空間内に位置し、亭主視深度グラフが正客を中心にして構成されている事がわかる。大半の茶室がこれに属する。

(A2)…方向性はあるが空間が分散しているもの。中柱によって区切られた空間がもう一つの広がりの空間となっているもの(18道安四疊半・09如庵)や、方向空間以外に広がりがあり方向性が弱まるもの(29養庵)が当てはまる。(A1)と比較して、亭主視深度にややゆとりがみられる。床は(A1)と同様、不連続部分となるため殆ど見えない。

(A3)…視深度変化が小さく空間が広いもの。床の一部を除いた部分で連続性をもつと同時に広がりをもつもの。床は(A1)と同様、不連続部分となるため、殆ど見えない。(A1)と比較して、かなり広がりが大きい。

(B1)…方向性のある空間と浅広い床空間を両方兼ね備え、更に床見えが大きいもの。(A1)と同様な方向性のある空間と床空間の2つが視深度グラフに現れている。しかし、床と「方向性空間」以外の空間は閉ざされた狭い空間である。

(B2)…床が奥深く見え、他の空間は広がりを持つもの。独特な視深度をもつものが多い。

(B3)…視深度変化が少なく、全般的に視深度が小さく変化も少ない。床も小さく現れる。

(B4)…視深度がなだらかに変化し、比較的床が大きく現れる。浅広い床の空間をみせる。正客視深度グラフに類似する。

#### ② 正客視深度グラフの分類と考察

正客視深度は、表3のとおり10種類に分類された。グループは、あくまでも床見えの違い、視深度変化の有無を中心としているが、ここでは茶室の固有の変化には注目せず、その分散と傾向により分類した。

(a1)…床見えが良く、視深度変化が大きいもの。31夕顔亭・16燕庵・06露滴庵は相伴席の付加によって、視深度が複雑になっている。

(a2)…床見えが良く、(a1)と比較して視深度変化が小さい。また、広がりが少なく、床と点前の空間が大きい。

(a3)…(a2)をやや奥深くした視深度をもつもの。点前の空間が奥深くなるため、その幅が狭くなり、亭主との関係が希薄になる。

(a4)…床見えが良く、視深度変化もあるが、他に類似していないもの。

(a5)…床見えが良く、床と狹縫部分が連続しているもの。狹縫部分に亭主が位置するため、人物の見えが他と異なるという特徴がある。

(a6)…床見えが良く、視深度全体に連続性があり広がりも大きいもの。

(a7)…(a6)と同型であり、奥行きがより浅くなつたもの。

(b1)…床見えが悪く、視深度変化があり奥深いもの。視深度変化の現

れ方と視

深度グラ  
フの形状  
はそれぞ  
れ異なる。

(b2)…床  
見えが悪く  
視深度変  
化と広がり  
のあるも  
の。(b1)と比  
較して、奥  
行きが浅く  
方向性が  
小さい。

(b3)…床  
見えが悪く  
視深度変  
化が単調  
なもの。13  
織部三疊  
台目は床  
部分の左  
側の、また  
30霞床席  
は床部分

の右側の視深度が急な変化をみせ不連続になるため、床見えが悪い。

### (2) 考察

亭主と正客の座位置毎に分類した結果、亭主視深度には、茶室間の類似性があることが分かる。特に、04利休二疊台目・03不審庵の亭主視深度グラフに見られる一方向のみに広がりをみせる(A1)のグラフや、26又隠などの(A3)のグラフにはそのグラフの形状に統一性が伺える。

正客視深度では、同タイプ内であっても、そのグラフ型は茶室ごとに少しずつ違いをみせる。特に(b1)・(b2)・(b3)においては、茶室間に類似する型はみられない。

また、亭主視深度グラフは、殆どのものが(A1)に集中する。11密庵席に代表されるように比較的  $360^\circ$  狹い前座から一方に向いていく平面構成は亭主の視空間の大きな特徴であり、その基本形は時代が下るに従い、32飛瀧亭などの方向性のある奥深い平面から間口が幅広くなる傾向、10元庵などの床の配置によって平面に変化を与えるもの、空間の方向性が全く無く千利休の02待庵と同様な平面性をみせるものなど、次第に展開していく過程が読み取れる。

それに対して、正客視深度グラフは茶室毎の特色が亭主視深度グラフよりも多種にわたって確認された。視深度グラフ自体の変化も大きく茶室毎の差異をみせているが、床見えは正客の視空間の印象を非常に変化に富ませることがわかる。10元庵のように、全体的に広がりのある平面構成において正客から遠いところに床を小さく添えるもの、26又隠のように広がりのある平面とは別に床見えを設けているもの、30霞床席のように床が正客に正面せず逆に視空間の一番変化の大きいところに床を配置したものなど、茶室を構成する各部の要素が反映されやすく、茶室の個性が現れやすいことが分かる。

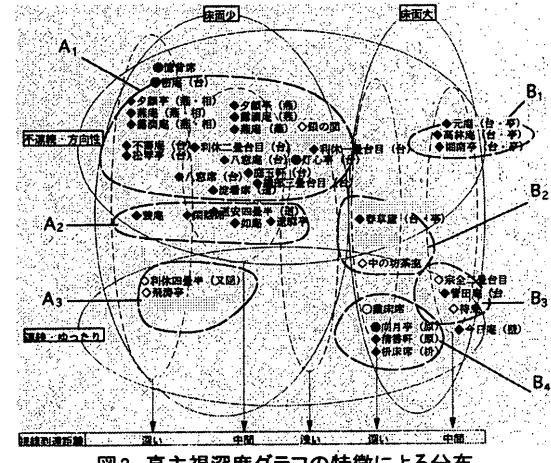


図3 亭主視深度グラフの特徴による分布

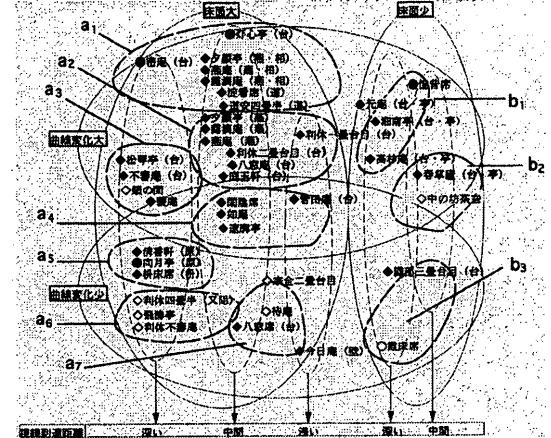


図4 正客視深度グラフの特徴による分布

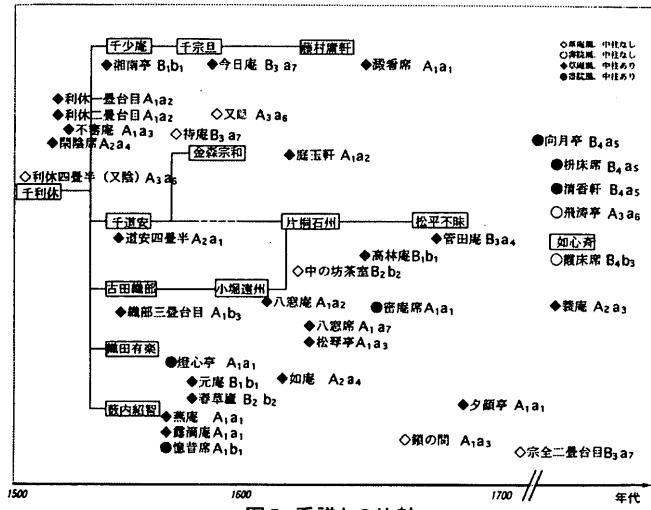


図5 系譜との比較

## 8. 結論

視深度による建築平面記述評価の可能性を探るため、茶匠の創意工夫が感じられる茶室を中心に、亭主と正客に分けて視深度を測定し、その視深度グラフを作成し、茶室における空間的な広がりについて考察を行った。初期の利休の茶室においては、必ず正客位置における床の囲いの手法が決まっていたものが、その後の茶匠らによって多様化していくことから、床に対する心構えの変化が伺えた。

そこで、茶匠の系譜図の上に、茶室の変遷と視深度による分類を重ねて整理すると、図5のとおりとなる。

まず、01利休四疊半は(A3a6)に類し、亭主視深度グラフ、正客視深度グラフの広がりが共に大きく、視空間に目立った変化は現れない。床見えの差はあるものの、共に空間的印象は似ていると考えられる。17閑陰席は、(A2a4)に類し、亭主視深度には緩やかな一方向性が見られ、正客視深度には点前空間が出現し、亭主が奥まった位置で点前する様子が分かる。亭主視深度と正客視深度に差が現れ始める。04利休二疊台目と05利休一疊台目は、(A1a2)に類し、正客視深度において、床空間・点前座・ゆとりの空間の三空間にはっきり分断される様子が分かる。亭主視深度は深い方向性が強くなり、床見えが悪い。亭主視深度と正客視深度に明確な差が見られる。05利休一疊台目は非常に小室なため、04利休二疊台目と比較して、正客視深度グラフが非常に狭苦しくなっているのに対し、点前座は方向性空間が浅広いものになり、床もやや見える程度の空間となり、位置性の差は弱まる。

02待庵は(B3a7)に類し、亭主視深度グラフは変化が少なく、ゆったりとしているが、広がりが分散し、空間の広がりがあり感じられない。床は添えられたように現れている。正客視深度は狭い空間の割にゆったりとした広がりが感じられる。

これらのことから、利休の試みによって、亭主と正客の視空間の差が明確になっていき、その後、古田織部、織田有楽、藪内紹智らによって、利休の形式を基本としながらも、亭主と正客の組み合わせは多様になつていった。正客視深度に変化が現れる(A1a1)や、亭主視深度に特徴が現れる(A2a1)、正客と亭主共に床見えが悪い(A1b2)、共に床見えが良い(B4a5)、四疊半茶室で、26又隠に類似する視深度グラフでありながら、正客と亭主のグラフが逆になる(B4b3)、視深度は変化が少なく、ゆったりと広がりを持ちながら、床見えの違いが曖昧である(B2b3)がある。利休の茶室からの脱却を試みると同時に床の見えが必ずしも正客に大きいものでは

なくなり、茶室によって様々な床見えの組み合わせが現れることが分かる。

このように、茶室の草庵化過程における亭主と正客それぞれの視空間の変遷から、亭主の位置の侘び、または面白味を決める要素として、利休の代表的な茶室を基本として、平面構成の工夫による視空間の発展や、特に正客に顕著であるが床の配置がその視空間を独特なものにするものなどが挙げられることが分かり、様々な茶室構成が視空間に与える影響による設計意図を伺うことができた。建築空間内において、人間の視点を設定し、それを取り巻く環境として、壁や柱に代表される視空間の構成を分析することにより、亭主の視空間には、正客の視空間と比較して、控えめで広がりの小さい視空間を構成するという茶室としての特性が現れ、そうした中で多様な変遷が存在するのに対し、正客を取り囲む視空間はその平面構成自体を変化させると同時に、茶室を構成する床や狹潜りや中柱という要素の配置も変化しており、茶室毎の印象が大きく異なることが伺えた。

既報までの分析で用いてきた平面図への濃淡の記述からは得られない様々な情報が、茶室において位置を示す重要な意味となって現れることから、位置性の分析においては視深度グラフが重要な役割を成している。次稿では、宗教建築物や支配者の宮殿や邸宅をはじめとする西洋建築を対象として視空間を評価し、古代から人間がどのように空間を創り上げてきたのかを分析していく。更に、これまで研究発表してきた近代住宅と茶室建築の空間性と比較しながら論じ、引き続き空間構成の方法論の歴史的で、文化的な評価を続けていきたい。

### 謝辞：

本研究を進めるにあたり、茶道久田流の加藤久岳教授と加藤宗薰教授から、茶の湯について終始、御指導を戴きました。記して謝意を表します。

### 注：

- 1) 研究対象の茶室によっては、竣工当時の空間構成と間取りやすさが変化しているものもあるため、本稿では現存する茶室の平面構成を測定の対象とした。
- 2) 視深度標準偏差は、ある視点での視深度の標準偏差であり、空間の広がりのばらつきを示し、dを視深度として、 $\sum(d_i - d_{\text{average}})^2 / 2 \pi$ により数学的に計算される。

### 参考文献：

- 1) 堀口捨己著、『茶室研究』鹿島研究所出版会、1969年
- 2) 堀口捨己著、『利休の茶室』鹿島研究所出版会、1968年
- 3) 堀口捨己著、『書院造りと数寄屋造りの研究』鹿島研究所出版会、1978年
- 4) 船越徹、熊倉功夫、中村和則、西和夫著、『茶室空間入門』彰国社、1992年
- 5) 中村昌生著、『茶の湯案内シリーズ⑦ 茶室の見方』主婦の友社、1987年
- 6) 北尾春道著、『茶室の案内』北尾推古書院、1970年
- 7) 北尾春道著、『茶室の材料と構法』彰国社、1967年
- 8) 松崎重雄著、『数寄屋設計考』理工学社、1996年
- 9) 岡田孝男著、『京の茶室 東山編』学芸出版社、1989年
- 10) 岡田孝男著、『京の茶室 西山・北山編』学芸出版社、1989年
- 11) 岡田孝男著、『京の茶室 千家・宮廷編』学芸出版社、1989年
- 12) 太田博太郎編集、『日本建築史基礎資料集成 二十』中央公論美術出版、1974年
- 13) 中村昌生監修、『国宝・重文の茶室』株式会社世界文化社、1997年
- 14) 中村昌生著、『茶室百選』淡文社、1985年
- 15) 早瀬幸彦、田中理嗣、近藤正一、若山滋：「視深度」による建築平面記述・評価の研究、日本建築学会計画系論文集、第484号、pp. 123-128、1996年6月
- 16) 早瀬幸彦、近藤正一、松本直司、若山滋：「視深度」による建築平面記述・評価の研究、近代住宅作品の主室の評価、日本建築学会計画系論文報告集、第493号、pp. 169-174、1997年3月
- 17) 早瀬幸彦、北川啓介、張健、松本直司、若山滋：「視深度」による建築平面記述・評価の研究、心理実験との比較考察、日本建築学会計画系論文報告集、第495号、pp. 125-129、1997年5月
- 18) 北川啓介、早瀬幸彦、近藤正一、張健、姜涌、若山滋：「視深度」による建築平面記述・評価の研究、壁と開口部を考慮した近代住宅作品の空間構成、日本建築学会計画系論文報告集、第522号、pp. 187-194、1999年8月
- 19) 青木義次、大佛俊泰、スキーマグラマーによる空間分析の方法論と都市プランへの応用—建築空間分析のためのスキーマグラマーに関する研究・その1—、日本建築学会計画系論文報告集、第446号、pp. 99-109、1993年4月
- 20) 山田哲也、藤原学：町屋平面のスキーマグラマー—建築空間分析のためのスキーマグラマーに関する研究・その2—、日本建築学会計画系論文報告集、第445号、pp. 119-127、1994年1月
- 21) 小沢朝江：桂離家の今出川屋敷における御茶屋について、日本建築学会計画系論文集、第463号、pp. 175-182、1994年9月

(2000年5月10日原稿受理、2000年10月31日採用決定)